

英語教育 チャットGPTで変わる？

朝日新聞 2023年6月11日(日) 朝刊

誰もが英語「使える」ツール登場—— 専門家に聞く

世界で1億人以上が使う生成AI（人工知能）の「ChatGPT（チャットGPT）」。質問を入力すると会話をするように答えが返ってくるのが特徴で、指示すればリアルタイムで翻訳もしてくれる。もはや、英語を学ぶ意味はあるのか。言語教育を研究する京都大の金丸敏幸准教授は「必修だった英語が選択式になる。そんな時代がここ数年で来るかもしれない」と話す。

——英語を学ばなくてもいい時代が来たのか。
英語の基礎は大事。引き続き、小中高での学習は続くだろう。ただ、「（大学では）必修科目でなくてもいいのではないか」という議論が、一部の大学で始まった。

チャットGPTは、アイデアや論旨の組み立てまでもやってくれる。専門的な資料も探してくれる。チャットGPTの答えが自分の考えと同じなのか、正しい回答かどうか、人間には見極める力こそが必要だ。英



金丸敏幸准教授

英語教育の意味は？

英語教育とは、英語を教えること、または英語を学ぶことを指します。英語は、国際的なコミュニケーションやビジネス、学術、観光などの様々な分野で重要な役割を果たしているため、多くの国で英語教育が行われています。英語教育の目的は、聞く、話す、読む、書くなどの英語のコミュニケーションスキルを向上させ、英語に関する知識を深めることです。また、英語を学ぶことで、異文化理解や自己発見などの効果も期待されます。

根拠となる論文はある？

英語教育に関する論文は非常に多く存在します。以下に、英語教育に関する代表的な論文をいくつか挙げてみます。

1. Ellis, R. (2008). The Study of Second Language Acquisition (2nd ed.). Oxford, UK: Oxford University Press.
第二言語習得に関する入門書。 Regenerate response 07701-1やろ、音で聞か

必修→選択科目への議論も 入試にも波及か

語の基礎がわかっていれば、大学で勉強するような専門的な英語は必要なくなるかもしれない。

——中学や高校の英語教育にも影響はあるか。

大いにあると思う。日本は英語を特別視しすぎている。入試があるために、理系、文系に関係なく、誰も英語からは逃れられない。他の教科・科目は選択できるのに、英語だけが特権的。英語にまったく興味がなく、学ぶ意味もわからないのに、やらされている。そんな生徒は少なくない。大学で英語が必修でなくなれば、大学入試に影響を与えるかもしれない。入試が変われば、中学や高校の英語も選択制になるかもしれない。英語が他の科目と同等になり得ると考えている。

受験勉強のためだけに英語を勉強したり、英語学習に時間を取られて本当に自分が学びたい分野に手が回らなかつたり。そのような自分の時間を犠牲にして英語を学ぶ必要性がなくなる可能性はある。

——変化はどの程度先の未来か。
一足飛びとはいかなくて、ここ数年で起き得る。チャットGPTにはそれぞれ

ChatGPTに「英語教育の意味は？」と尋ねると答えが返ってくる。「根拠となる論文はある？」とさらに聞くと、いくつかの論文を挙げた

教職に影響の可能性 なぜ学ぶか考える機会に

らしいインパクトがあった。正確性やセキュリティの不安もあるが、チャットGPTを使えば、誰もが等しく英語を使うことができる時代になりつつある。

——英語教師は必要なくなるか。

米国の学者が今年書いた論文では、AIの影響を受ける可能性の高い職業の2位に英語教師が入った。3位は外国語教師、10位までの八つを教職が占めた。

日本では、1991年に大学の設置基準の改正で科目ごとの最低単位数がなくなり、大学が自由にカリキュラムを設定できるようになった。結果、ドイツ語やフランス語といった第2外国語を廃止する大学も増加。多くの教員が職を失った。

その時に、教員たちは考えた。「この言語を教える意味はなんだろうか？」。英語教員たちも、その問い直しをする時期にきた。英語を学ぶことだけが異文化を知る手段ではない。それは生徒や学生も同じ。「なぜ、英語を学ぶのか」「英語を使って何をしたいのか」を再確認するチャンスになればいい。

——英語を学ぶこと自体も揺らぐのか。

英語がグローバルスタンダードであることは変わらない。また、ニュアンスや文化的背景を踏まえた高度な英語を駆使しなければならぬ翻訳家、通訳といった職業がなくなるとは思わない。チャットGPTは道具。平均的なコミュニケーションは代替できて、それ以上の知的作業は人間の力が必要だ。

聞き手・江百川夏樹